

# 2009年小笠原日食

石塚 敏晴 (1969天写)

2009年の日食は今世紀最大級と前評判も高く、しかも日本で見られるとあってはいやがおうにも盛り上がらないはずがない。ほとんどの人が名前など知らなかった悪石島などはマスコミに大々的に取り上げられ、一躍有名になってしまった。

実は今回の日食は1995年のタイ日食後、相模原友の会（通称サガトモと我々は呼んでいる）メンバーが集まった際、次の1999年はヨーロッパ、2006年はトルコ、2009年は上海と一緒にいくことで皆の意見が一致していた。しかし、ヨーロッパ、トルコは各人の調整がつかず結局個人で行くことになった。それゆえサガトモメンバーと一緒に行けるのは今回の上海が最後の機会ではないかとなり、1年ほど前から準備を開始した。

準備が進むにつれ、上海はやや問題ありでトカラ列島も良いのではとなり、ツアー情報を集めたが、インフラの問題、ツアー料金が高額などで次第にトカラ列島案は立ち消えになった。

そこに浮上してきたのが小笠原丸での船上日食ツアーの情報だった。船酔いの不安があったが、私はこのツアーに早速応募した。他のメンバーも応募したと思いきや、結局応募したのは私と越智さんだけで、中島君と小澤君は応募していなかった。

船上ツアーにはかなりの数の応募があったようだが、見事2人とも抽選に当たり行かれることとなった。この頃になると、TUD-OBのメール上でも上海組、トカラ組、奄美組などのツアー情報が飛び交い、賑わいを見せたが小笠原組の

情報は行く人がいないのかほとんど何も無かった。

私は過去2度ほど日食を見に行ったが、1勝1引き分けと言ったところだろうか。最初タイに行った時はよく晴れて皆既日食には絶好のコンディションだったがビデオ撮影で忙しく、じっくり日食を見たとの印象があまりなかった。

2回目オーストリアに行った時は今回の奄美大島のような状況に近く雲を通しての日食となり悔しい思いをした。あと何回見られるか分からないが、今回3回目はじっくりと肉眼で見てみよう、決めたい。メール上でのやり取りから、各地に赴く観測隊がかなり重装備で人数も多く、日食終了後は素晴らしい写真などが見られることを期待していた。

7月20日、コンパクトにまとめた荷物を背に、双眼鏡をぶら下げて竹芝栈橋に。越智さんとここで合流。ところで小笠原丸での日食ツアーと言うと、ニュースでやっていた豪華客船を使っただけのツアーと知っている人が多く羨ましがられたが、これは全くの誤解で我々が行ったのは定期便の小笠原丸を使っただけの洋上観測で、とても豪華とは言いがたいツアーであったことを申し述べておく。

小笠原丸は全長131m、6700トンで1000人以上が乗れるらしい。越智さん親娘と私たち夫婦は個室を希望したが見事外れて船底の奴隷部屋のような2等船室でごろ寝とあいなつた。ごろ寝と言っても寝返りをうてないような狭さで辟易とした。そんな狭い船室を抜け出し早速デッキで酒盛りと相成った。

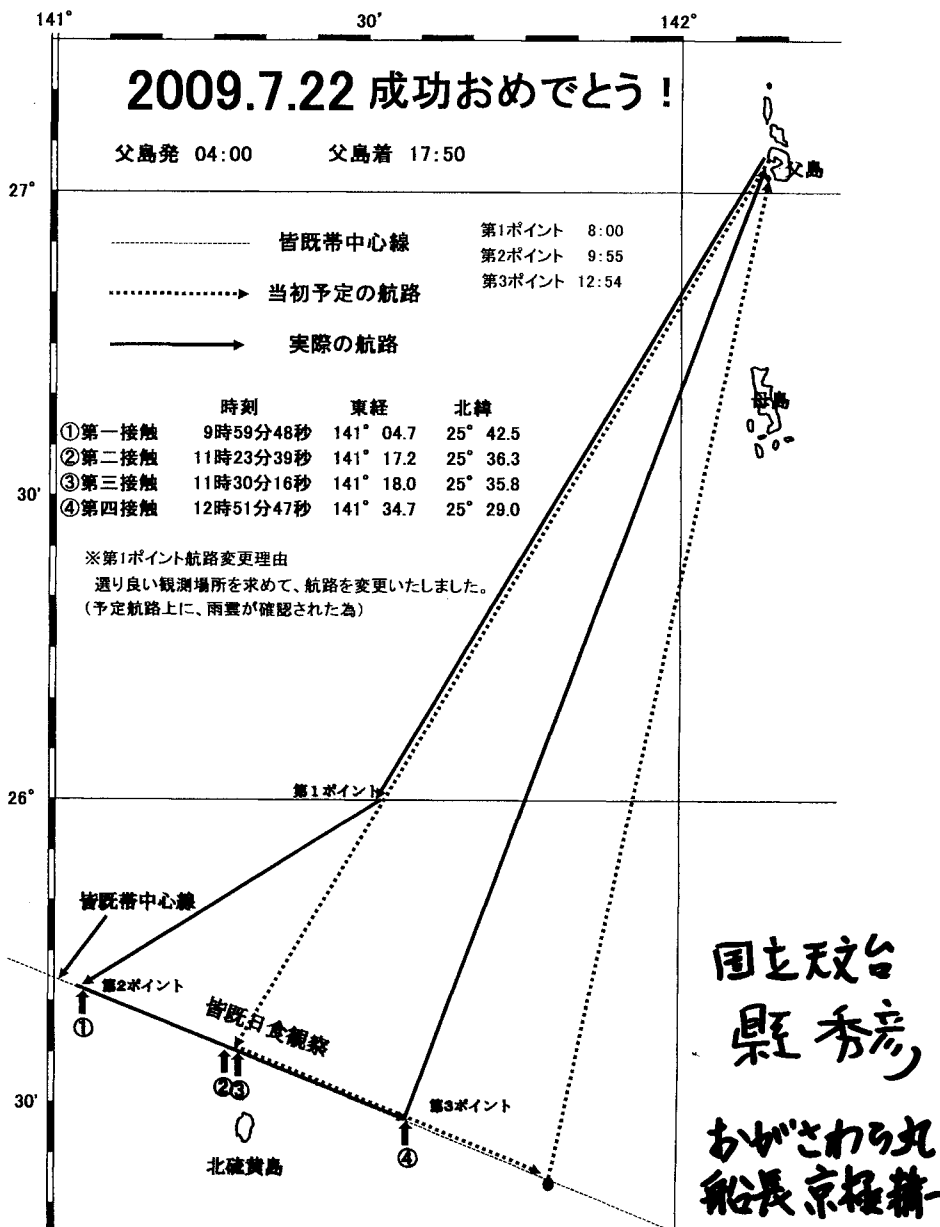
翌朝（7月21日）、目覚めると快晴で海の色はコバルトブルーと言うのだろうか、今まで見たこともないようなすごい色だった。12時近く父島の二見港に到着。早速迎えの車に乗り込んでそれぞれの宿に向かう。

半日近く島内観光したあと、宿で夕食をとり21時ころ再度小笠原丸に乗船。今度は1等船室がとれていたのが快適である。二見港に停泊したまま一夜を過ごし、翌朝4時ころであろうか、いよいよ観測地向かって出港した。

空はほとんど雲もなく、絶好の日食日和となったが、硫黄島近海はどうなのだろうかと一抹の不安がないわけではなかった。トカラや上海はあまり天気が良さそうではないと昨日の天気予報では言っていたが、どうなのだろうかと思気になった。途中右手にクジラが見えますとのアナウンスに皆どっとデッキに集まったが、後の祭りでもクジラの姿はどこへやら。その後も何度かクジラが見えたようだが、私は尻尾を見ただけだった。後でわかった話だが、予定海域の天候が思わしくなく、船長やスタッフの判断で途中から進路を変更していたのだった。後日BS朝日で放映した東海大学の望星丸の船長も同じように進路変更をして、結局それが好結果につながった。小笠原丸も同様で、船長の判断に感謝である。

予定海域に近づくにつれ、前方に島影が見えてきた。北硫黄島である。午前8時ころ変更後の予定海域に到着し、そこから皆既日食の中心線付近を時速10ノット程度であろうか

# おがさわら丸 皆既日食観測



望遠、それにメール上でどなたかが紹介していた10000倍のNDフィルターを用意し、船上で観測準備中。船の上ということもあり、ほとんどの人が三脚で撮影している。抽選で船尾の方が当たった越智さん親娘も、手持無沙汰気味で船の上をふらふら歩いていた。昨晚30cm超のドブソニアンで臨時観望会を開いていたどこかのお兄ちゃんも、訳のわからない観測機材を揃えて準備に余念がない。そうこうするうちに第二接触の時間が近づいてきた。我々も指定された場所に戻り準備を始める。準備と言ってもゴロリと寝転がる場所を作るだけだが。先ほどから小さな雲がいくつかゆっくりと太陽を遮っていく。太陽の行く手にも小さな雲の塊がいくつかある。ちょっと不安だ。

午前11時23分、心配された雲も行き過ぎて当分邪魔になるような雲はなさそうだ。皆既間近を思わせるように周囲が急に暗くなっていく。気温も数度は下がっているようだ。カウントダウンが、始まる。5、4、3、2、1。いよいよ皆既だ。みんな言いようのない感動の声をあげている。ただダイヤモンドリングはあまりきれいには見えなかった。極方向にコロナが延び赤道方向にはあまり延びない太陽の極小期の特徴がよく出ている。双眼鏡で見ると更に細部までよく見える。一方地平線を見ると、どの方向も夕焼けのように真っ赤だ。二度ほど経験した日食はまるで夜のよう暗かったが、それに比べ空が明るく感ずる。

金星や木星などの明るい星はすぐにわかるが、あまり明

ゆっくり走る。船に無知な私は止まっていればいいのにと考えた、止まっていると揺れが大きいらしい。あらかじめ抽選で各自の観測場所が決められ、私たちは船首左舷側に陣取った。まあまああの場所である。

午前10時近く、いよいよ第一接触が始まったと放送があったが肉眼で見てもよくわからなかったが、数分経つと肉眼でもハッキリと欠けているのがわかるようになった。

だが船の中ではどちらが北なのかよく方向が分からないので、欠け始めた位置がいまいち不明確であった。

5～6分もすると時間の経つのが恐ろしく遅いような気分となり、また第二接触までまだ1時間以上もあるので、他の人たちの動向を探りに船の上をあちこち歩き回った。1等船室は4人部屋で、同室となった70過ぎの老夫婦のご主人は、フルサイズデジタル一眼レフと300mmくらいの

るくない星は見えない。後で越智さんも空が明るく感じたと言っていた。海の上と言うことと何か関係があるのだろうか。確かなことはわからない。当日夜のNHKのニュースでやっていたようなフレア現象は倍率7倍の双眼鏡では確認できなかった。

11時30分、6分以上と随分長い皆既日食であるが、そろそろ終わりに近づき第三接触が始まる。ダイヤモンドリングが見える。第二接触に比べると随分明るくとてもきれいに見える。急速に周囲が明るくなり、あっという間に現

実の世界に戻ってきてしまった。

第三接触が終わり、船内の売店で日食ランチと生ビールで乾杯！ 第四接触が終わり、船は父島に戻る。父島着17時。宿に戻って宿泊者、オーナーなどと、しばし日食の話題に話が弾む。

翌23日は一日中島内観光。24日午後父島を後に帰路に就いた。帰りは出港前に1等船室のキャンセルがないかダメもとで問い合わせると、運よく4人分空いており行きのような目にあわずに済んだの

は何よりだった。日食がなければ多分小笠原に来ることはなかったと思うがまあ皆さんも一度はきても良いんじゃないでしょうか。それでは。



たそがれる二人（おがさわら丸船上にて）